

ピリピ人への手紙の学びが少しずつ進んでいきます。たくさん節をまとめて学ぶこともできますが、細かく学びながら、教えられていきたいと思えます。今朝も3節だけです。

1. 完成へと至る良い働き (1章6節)

- ①良い働きを始められた方 ピリピの教会の働きを開始したのはパウロです。彼は幻を見て導かれ、マケドニヤに向かい、その道筋からピリピへと向かったのです。そこは地方第一の町で植民都市でした。祈り場で集まっている紫布の商人ルデアと出会い、福音を伝え家族にバプテスマを受けたのです。また牢獄に入ったときには、看守の一家の救いの出来事もありました(使徒の働き16章)。家族が救われていき、この教会はさらに成長していきました。しかし、パウロはこの働きを始められたのは主であることを明言します。
- ②キリストの日が来るまでに 「キリストの日」というのは、既に十字架上で死に復活された主がまた来られるその日のことです。再臨の日が来るまでにとありますが、パウロは常に終わり日のことを念頭においていました。多忙な生活にあると、目の前のことを考えることに明け暮れます。なのに、5年後、10年後、20年後のことは心配しています。キリストの日という視点は、キリストにある生の原点へと私達を導きます。
- ③完成して下さる パウロはその日までに、このピリピの教会の人々の信仰が完成に至っていくと信じています。彼らのうちの救いの御業を始めてくださった主は、彼らを霊的に成長させ、信仰の高嶺へと導き、栄光の教会へと進むように祈りながら、手紙をしたためているのです。

2. いかなる時も (1章7節)

- ①正しい考え 「自分は正しい」と言う傾向の強い人がいます。一方、自信なく「自分が悪い」と言う傾向の強い人もいます。ここの「正しい」は元の言葉でデカイオス。「正しい」が原義ですが「当然である」と訳すこともできます。後者の人が本当の罪意識を持っているならそれは良いのです。パウロは罪を悔い改めつつ福音を宣べ、正当とすることについては確信をもって伝えているのです。
- ②投獄されている時も 上記したように、パウロはピリピにいる間にも投獄されています。しかし、そこで恵みの出来事が起きたのです。牢獄の中でのパウロやシラスの賛美や信仰は囚人たち大きな影響を与え、地震が起きた時もパウロの影響で逃げ出さず、看守はその驚くべき様から主を信じるようになったのです。(使徒16:19-34)。ここでは、この出来事の背後でもピリピの教会の人々の篤い祈りがあったことでしょう。
- ③ともに恵みにあずかる パウロは祈りの人でしたから、牢獄にあっても諸教会の人々のために祈りました。もちろん、ピリピの教会の兄弟姉妹のためにも祈りました。その時に霊的なつながりを深く感じたのでしょう。(コイノニヤの関連語が使われている)。主の恵みにともにあずかる人々であるとの確信が与えられていたのでしょう。だからこそ、パウロは「そのようなあなたがたを、心に覚えているのです。」と伝えたのです。

3. ピリピの教会を慕い (1章8節)

- ①キリストの愛の心をもって キリスト・イエスの愛の心とは何でしょうか。それは、言い換えればアガペーの愛(神の愛)であり、無私な愛、犠牲的な愛、献身的な愛、打算抜きな愛です。生まれながらの私達性質はどうでしょう。自分中心でありましょう。自分をどこまでも守るものでしょう。打算的でありましょう。
- ②あなたがたを慕い パウロはピリピの人々を慕ってすらいたのです。伴侶を慕う、親を慕う、子を慕う、恩師を慕う、異性を慕うとかいいますが、情熱がこもっている言葉ですね。パウロはピリピの人々に対して、格別の感情がありました。また、この教会の真実性を深く受け止めていたのでしょう。
- ③証しして下さる神 それほどの愛や慕い求める心は、人間には証明できないかもしれない。傍からその熱さを計ることはできないでしょうが、証明して下さる方がいると彼はいます。それは主なる神であると。

《結論》 クリスチャンに成長はあるのでしょうか。つまり霊的成長というはあるのでしょうか。ある人は考えるでしょう。「大分年数が経ったけれど、あまり霊的成長しているように思えない」とか、「初期の頃の方が純粋だった」とか、「これからも成長するとは思えない」とか。しかし、聖書は「乳ばかり飲んでいる幼子」「堅い食物はおとなの物」(ヘブル人への手紙5:13-14)というように、霊的な子供や大人があることを教えてくれます。パウロも同様のことを言っています(1コリント3:1-3)。ピリピの教会は、問題もありましたが、順調に霊的成長をしていたようです。パウロが「完成して下さる」とか「慕わしい」というほどに、霊的な教会だったので。霊的成長は一人一人のクリスチャンは上記のヘブル5:13,14などを見ても明らかのように、いつまでも乳ばかり飲むのではなく、堅い食べ物を食する必要があります。具体的に言えば、聖書の御言葉も好き嫌なく食べることです。祈る時、願うばかりではなく、賛美、感謝、悔い改めつつ、とりなしていきましょう。霊想書の数々は、一言でいえば信仰の成長を教え促すものです。助けになるでしょう。信仰成長の過程においては、委ねることや献身も必要でしょう。その時こそ成長のチャンスなのです。一步踏み出しましょう。思い切って委ねましょう。人間的な見方から脱し、霊的洞察を与えられていきましょう。個人の霊的成長は良き交わりが生まれます。良い交わりはクリスチャンを成長させます。パウロから「姉ヶ崎の教会を慕っている」と言われたら良いですね。